

十二月十日

三年生の設計製図を見ていて考えた。彼等は指導すればする程、教えれば教える程に少しずつ上達する。要するに設計（デザイン）は学ぶもの、勉強するものだと考えているらしい節がある。優秀な学生程、そんな傾向が強い。教師をやっているこれは禁句であるが、私は心の奥底では設計は自分で上達するもので他人から学ぶものではないと考えている。つまり人間には抜き難い個性らしきがあつて、それぞれの才質があつて、それを掘り起こすのも又、自分自身でしか無いと言つ事だ。

しかし、彼等は学ぼうとする。それ故に教えれば皆同じようになつてゆく。一人一人の才質に対応してゆこうとするのは大変なエネルギーを要する。これは禅の修行と同じで、書き物、つまりマニュアルではなく口伝がすべてとなる。個別な才質を発見して開花させようとするのは、又、それなりの才質を持たねば出来ない。多分、それはモノを作るよりは余程困難なことではある。それをやるのは本当の師弟関係しかあり得ない。それをやるのは一度切りだろう。それ故教える方法はどうしてもアブストラクटना性格を帯びざるを得ない。で、そうする。設計製図は又、高度な水準になればなる程に全人格的な性格をも帯びてくる。

それ故に、教えれば教える程に、学生の設計製図は皆同じようなものになつてゆく。

学生ばかりではない。最近の若い建築家達の仕事が皆同じような類型のものに収斂している現象の正体は、実にそういうところ

にあるのではないか。

先日、G Aの対談で東工大の塚本君と話した時に彼が言っていた。どうしても僕等は皆同じように考えるようになって、というのもその根底には、デザインを学ぶという姿勢があるのではないか。それを私は民主的な姿勢と簡単に言ってしまったのだが、あれは個々人の才質の開花の方法について言おうとしたのだと、今日気が付いた。対談はどれも苦手だ。なるべく出ないようになりたい。

夕方、研究室の石井君と少し話をした。優秀な学生で、特に感性は柔らかい。彼も又、一生懸命、学ぼうとする。私は彼くらいの才質があれば自分で勝手にドンドンやれば良いのにも思うのだが、そのところのズレが仲々伝えにくい。

要するに若い諸君は皆おしなべて学ぶ人種になつていっているらしい。学校つてところは学ぶところだろうと言つ当たり前の枠の外で今考えている。ようやく日本の民主主義的教育が成熟したと考えるべきか、飽和状態と受け取るのか。しかし、この状態からは本格的な新しさは出ない。